

紹介

ディミータル・アングロフ著
寺島憲治訳

『異端の宗派 ボゴミール』

ボゴミール。東欧・ビザンツの歴史においてはもちろんのこと、西欧中世史においても「異端」を語ろうとすると、必ず出てくる。それが表題にあるこの宗派で、十世紀のブルガリアに始まり、正教側からは常に「異端」として迫害されたが、逆にその勢力はバルカン、小アジアのビザンツ文化圏一帯に根を下ろし、ロシアにも拡大する一方、西欧カトリ派にも直接・間接の影響を与えた。その徹底した現世の社会秩序を拒否する教理は、教会や王権の神経をとがらせ、逆に民衆には深く広く支持されていた。

本書は、そのボゴミール派播盤の地、ブルガリアの研究者の手になるものの翻訳・原著者アングロフはこの分野での泰斗で、原著書は既に数ヶ国語に訳出された彼の代表作である(原題 *И. Ахрезов, Богомилци-*

срото в България Sophia, 1969, 第二版)。また、訳者も関係論文を発表している。我国ではなじみの少ない分野ではあるが、近年緒につきはじめたビザンツ史の研究に對しても、また東欧への関心の高まる中においても、定評ある著書の翻訳刊行は、今後に確かな指針を与えるものと評価できよう。

本書の内容は、全体で五章に分れるが、相互に独立性が高く、各章ごとに関心に從つて読むことができる。ただ、そのために繰り返しが多くなつて通読する時わずらわしいこともあるかもしれない。また、著述の大半は、三章と五章で占められていて、全体的にややバランスも欠けている。

しかし、著者の姿勢は一貫したものがあつる。第一章「ボゴミール派の起源」の冒頭、アングロフはこの宗派の運動を定義して、「これは、本質的には封建的重圧に對する社会運動であり、形式的には公式教会のドグマから逸脱した異端」であつたと述べる。皇帝を頂点とする、貴族や上級聖職者ら上層支配階層に對する抑圧された下層農民の、階級的反抗。これが運動の本質であつたと著者は考へる。しかし、反抗はそのままの

形では表現されず、時代的制約を受ける。すなわち、科学も未発達で、自覚した階級も成熟していない段階では、運動は宗教の形式を採らざるを得なかつたのだと言つのである。本質は階級闘争で、形式は同時代の宗教イデオロギーを借用するという考へ方は、本書のどの部分にも一貫して見受けられる。第一章では、まず十世紀ブルガリアの内外の社会状況の混乱が、直接・間接の背景として描かれ、ついで第二章「ブルガリアにおけるボゴミール派の出現」では、史料から具体的にその初期の發展をあとづけているが、著書の構想は随所に現れている。

続く第三章「ボゴミール派の本質―教義と見解」は、本書の庄巻の一つである。『秘密の書』なる『聖ヨハネの書』によると、人間の住む地上のこの世は、実は神の創造したものではなく、神に追放された悪しき墮天使・サタナエルの作つたものだと言ふ。だから、人間はその支配下にあつて、様々な悪しき誘惑や災害の犠牲になつており、従つて本当に神を信じようとする者は、教会の行なう様々な儀式も含め、地上になど神の恩寵や秩序を見出してはならないと考

えたのである。

ポゴミール派のこの見解からまず連想するのは、本書にもあるように、古代のグノーシスの思想である。グノーシスの人々もまた、造物主は悪しきものであり、従ってまたこの世の支配秩序も悪神のあらわれと見た。これは当時のローマ支配層や、その後継者たる教会の正統的な古代宇宙論、すなわちこの世の秩序もまた天上界より不完全で汚れてはいるが、神の意志を示すとする思想と真向から対立した。このようなグノーシスの思潮が、この時代にまで脈々と生き続けていたことにまず驚く。

だが、それだけではなく、禁止をものともせずに民間に流布していた様々な聖書外典や当時の社会的現実を加味しつつ、ポゴミール派は、そのオリジナルな活動を展開した。公会議決議や教父の説教、これはイエスの語りもしない掟や取り決めを、自分勝手に捏造したので無効。当時の聖職者や修道士などは腐敗の極みで、こんな連中は実はサタナエルの手先に過ぎず、彼らの与えた洗礼やあれこれの儀式は一切効力がない。また、神は「人の手の業」になる建物に住んだりしないから、聖堂も不要。それ

から告解なども「徒らな言葉」に過ぎないし、十字架や聖遺物崇敬は偶像崇拜に他ならない。これだけそうとうと、教会当局もあわてざるを得なかったであろう。ポゴミールの見解は、教会と国家が協力して作ってきた権威と秩序を根本的に無化し、解体してしまふものだったからである。しかも、彼らは痛い所を突いていた。「汝らの言うように、もし汝らが聖職者であるのなら、なぜ汝らは、パウロがテモテの人びとに書き命じたように暮らさないのであるか。『それ監督は、責むべきところなく、一人の妻の夫にして、みずから制し、慎み、品行正しく』後略」だが、われわれは、汝らがこのような者であるとは思えない。」正教側は、これにまともな反論できなかったようである。

既存の制度にこれほど敵対的な態度を取るポゴミール派は、では具体的な歴史の文脈の中では、どう位置づけられるのであるうか。第四章「ポゴミール派の組織」において、宗派内の構成を手短かに述べた後、第五章「ポゴミール派の歴史」において、アングエロフはそれを試みる。

しかし、結論的に言えば、どうもこの試

みは、あまり成功していないように思える。第三章で鮮明にその世界観を描くことができたにもかかわらず、この章では図式化と類推が目立ち、叙述もまとまりがない。それは、階級闘争に直結させ過ぎるために、何らかの反「ビザンティン」(訳者表記に従う)蜂起や、農民反乱があると、必ず詳しく取り上げていくのだが、史料的には全くポゴミールとの接点が裏付けられず、ただその教義からして当然何らかの関係があったはず、と推測を繰り返すからである。宮廷や上級聖職者までポゴミールの考えが広まったことで、皇帝アレクシオス自ら審問に乗り出す部分や、地方に拡大したポゴミール信者を正教に引戻そうとする聖職者の記録等に、時折鮮明に彼らの実態が示される。しかし、これは農民反乱や反「ビザンティン」の活動とは言えない性質のものである。カタリ派やロシアへの影響も、具体的にはあるが、これも抑圧された農民の階級闘争とは関係がない。

やはり、宗教には宗教の自律性があって、第三章で図らずも「ポゴミール派の本質」と訳出されているように、その教義、見解は、単に階級闘争の「本質」を表現する「形式」

であるにとどまらず、それ自体一つの「本質」となっていたと見るべきではなからうか。

評者がこのように考えるのも、同じく東方で古代末期の単性論派をはじめ、宗教運動に対する位置づけが変わってきているからである。単性論派も、既存の教会やビザンツ国家への反抗の態度から、安易に下層オリエント住民の民族的・階級的な闘争とされてきたが、今日このような見方は反省を強いられている。これは、階級史観が意味がないとか、社会矛盾が存在しなかったということではない。全ての階級や住民カテゴリーを貫通して、上下あまねく受容すべき宗教によって國家の秩序が整えられていく時、それを無化する動きもまた、階級や住民の色分けを越えて広がりを持つのではないか。それ故に個々の反乱とは容易には結びつかないこともある。こう考えるからである。

このようなことは、しかし逆に評者の類推にしか過ぎない。この点で、ボゴミール研究を實際にされている訳者に、簡単であっても、ボゴミールに対する近年の研究状況や、さらに読むべきものなどの紹介があ

ってもよかった。類書が皆無でもあるだけに、また隣接分野の研究者も、ブルガリア語の文献をおいそれとは当たれないだけに、一層その観を強くする。貴重な労作であることは確実と思われるので、今後これを我國の西洋史研究の中に固定できるような進展を待ちたい。

(A5版 四一五頁 一九八九年
十二月 恒文社 四五〇〇円)
足立広明 同志社大学大学院生

日本学術会議だより

— No. 16 —

平成二年二月 日本学術会議広報委員会

日本学術会議は、平成元年度に主催の公開講演会を三回開催した。今回の日本学術会議だよりでは、その公開講演会の概要に加えて、本会議が実施している国際的活動などについて、お知らせする。

◇日本学術会議主催公開講演会

本会議では、科学の向上発達を図り、行政、産業及び国民生活に科学を反映浸透させるという本会議の設置目的に沿うための活動の一環として、毎年、公開講演会を開催している。この講演会は、本会議会員が講師となり、学術的香気が高く、かつ、時宜にかなったテーマを選定して開催している。

今年度も三回の公開講演会を開催したので、その概要を以下に紹介する。(中略)

Ⅱ、公開講演会「『人権の歩み』から何を学ぶか—フランス人権宣言二〇〇年を記念して—」

標記講演会は、去る平成元年一月一八